

金井美恵子



プ。ラトンの戀愛

金井美恵子

ンの恋愛

プラトンの恋愛

九五〇円

著者 金井美恵子

装幀者 金井久美子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 〒112

電話 東京(03)(945)1111(大代表)

振替 東京 8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

一九七九年七月二十四日 第一刷発行



0093-306272-2253 (0) (文2)

© Mieko Kanai 1979 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えます。

プラトンの恋愛

目次

プラトンの恋愛	5
桃の園	21
二つの死	39
才子佳人	55
アルゴス	83
年齢について	101
木の箱	119
日記	137
公園の中の水族館	157
花嫁たち	177
もう一つの薔薇	205
あとがき	236

プラトンの恋愛

わたしが〈作者〉であることを、彼女に証明しなければならぬのだとすれば、文章を書くこと、あるいは作品を書くことによって証明しなければならぬだろう。彼女を知ったのは、と言っても、この場合、果して知ったという言葉が正確にあて嵌まるかどうかからないのだが、ともかく、わたしがはじめて小説を書いた時以来、彼女とわたしの奇妙な関係がはじまった。手紙がとどいて、のっけから、あなたの名前で発表された小説を書いたのはわたしです、と書き出してあった。同じ書き出しの手紙が、ちょうどわたしの書いた小説の数だけ手許に溜り、わたしはその奇妙な手紙を無視しつづけようとしながら、実は無視することなどまったく出来ずにいたというわけだ。ようするに、わたしは小説を書きつづけることによつて常に彼女と一緒にいたというわけだ。住所も氏名も書いてはないのだから、どうやってその手紙の書き手である、〈本当の作者〉に對して、何か言うことが出来ただろう。本当の作者とわたしとの関係は、まったくの一方通行だったのである。もちろん、この〈一方通行〉といういい方は、わたしの立場にそくしてであり、彼女にしてみれば、

そうは思っていないかもしれないのだし、一応彼女と書いた手紙の書き手の性別だって知ってはいない。

最初の頃の手紙はもう封筒の色が黄ばんでしまっている。大きさや紙質はまちまちの白い角封筒で、インクの色も、緑やセピアや紫色がその時々によって使われていた。緑やセピアや紫の色インクなど、大正時代の趣味めいてわたしは嫌いだ。筆跡は、まず無個性的とでも言うべきだろうか。戦後の人間がほとんどそうであるように、毛筆の習字とはあからさまに無縁の、活字を手本に字を覚えたという、およそ下手糞と言ってみるのもおかしいくらいの字で、はつきり言えば、わたしの書く字とおなじで、読めれば文句はないだろう、と開き直って妙に跳ねあがったところが、その精神に似ていないこともない、という字である。

多分、同じような内容の小説を書くこうとしていた人物がいて——それは大いにあり得ることのように思えたし、いわゆる処女作と言うべきわたしの小説について、同年の詩を書いている青年は、あの程度なら一晩で書いてみせる、と言ってわたしを驚かせたものだ。あの程度なら、およそ小説と呼ばれるものの一つ二つ読んだことのあるほどの人間であれば、誰だって書ける、と言うのである。そういわれてみて、わたしはなるほどと思った。

——まったく同一の内容などということとは考えられないにせよ、よく似た小説を書いたということは、あり得ないわけでもあるまい。《作品》というのは、ようするに、そういうものではないのか。彼女の最初の手紙を読んで——きれいにたたまれた厚手の洋紙を開く時の、あの、かさかさという触覚的な音を、覚えている——いささか、いわば、誇りともいったものにこだわったための不快の念を禁じ得なかったとはいえ、それにしても、作者なんか誰だって、本当のところわたしにはどうでもいいように思えもしたのである。それを書いたという自負心など、書いたのが自分であればなおさら、苦々しい思いにすぐさま取ってかわる。あの小説の《作者》であることはその未知の人物にまかせて、わたしは別的小説の《作者》になるべきではなかっただろうか。そう、別の小説の《作者》を名乗ること——。

手紙は小説を発表するたびに必ずわたしのもとに送られてきたので、いささかうんざりしないではいられなかった。しかし、彼女はわたしにとって一等熱心でかつ本質的な読者であることは確かなのだし、というより、まさしく彼女は作者と名乗り、そしてもしかし

たらそれは本当のことなのかもしれないのだし、いずれにしても、彼女の手紙によってわたしははじめて、ある一つの小説が書かれた（彼女によってか、わたしによってか）ことを知ることにもなるのだった。このことを、わたしはずっと秘密にしてきた。どう説明していいのかわからなかったし、彼女のことを人に告げるのは、なぜかはばかられるような気がしたからだ。

しかし、わたしがどう書こうとも、彼女はそれは自分が書いたのだと、主張するだろう。それではいったい、わたしはいつあなたの書いたものを読んだのでしよう、とわたしが質問する。すると彼女は少し微笑を浮べて——わたしはその彼女の微笑を、無意識のうちに美しいと想像しがちだ——そう、微笑を浮べて、あなたはそんなことも覚えていないんですか、と言うかもしれない。もともと、わたしは彼女に質問してみることも出来ず、ただ、彼女の書くものを読むことだけが、まるで選ばれた恩恵でもあるかのように許されている。すなわち、小説を書くことによって、わたしと彼女の関係がはじまるのである。

わたしは彼女のためにある意味では苦しめられていたのだが、しだいに彼女に対する好奇心、彼女がどんな人間でどんな生活をして、どんな物に愛着を持っているのか、どんな経験を持っているのか、いったい何を考えているのか、知りたいと願うようになっていた。彼女に肉体というものを与えてみようとしたのである。しかし、彼女に肉体があるということ、彼女がはたして、女であるのか男であるのかということを含めて、わたしは疑っていた。正直いって、わたしは自分の肉体を軽蔑していたので、〈本当の作者〉の肉体もまた、そう堂々と美しいものであるとは考えづらかったのだ。恋する詩人のように、わたしは口ずさむ。ああ、きみに肉体があるとはふしぎだ。わたしの（わたしたち、の）夢に吊されて――。もし、あれらの数多くはない約（つよ）しく貧弱な作品（こんな言い方は彼女の存在を蔑（あなづ）しているということにでもなるというのだろうか）は、わたしが書いたのではなく、彼女が書いたのだとすれば、それらの作品と無縁でいることの幸福はわたしのものになるようにも思えた。けれど、現実にはわたしは自分の手で文字を書き、あるいは書けなさの内に閉じ込められているのであった。こういうことも考えられた。誰か、作家にあって、あなたは本当の作者という人物から手紙をもらった経験がございませんか、と質問す

るのである。悪質で手のこんだしかもかなり高級なはずをする人物の被害者はわたしだけではない、ということを確認することが出来るかもしれない。これが悪質で執拗なはずらでないという証拠はないのである。

とは言うものの、もちろんわたしはこうしたことには四六時中わずらわされていたわけではない。わたしにはわたしの生活があつて、そしてそれを楽しむということも充分出来た。変哲もないあたりまえの生活、退屈することもあるけれど、その退屈が心を蝕むような時間ではなくて、不幸というものによってその硬度を測定するような現実のどうやら貴重なものであるらしい経験など、わたしには興味がない。ようするに、わたしはおそらくは、若くまだ瑞々しい感受性というものが甘受しなければならぬあの明確で鮮明すぎる輪廓を持った世界との出会いを、痛々しい異和感で受け取らなくてもすむようになれたのだ。書けないという圧倒的な世界に閉じ込められていると感ずる時、すでにわたしは書きはじめようとしているのではないか。そして、これは多分作家というものが誰しもそうであるように、わたしは自分の書いた小説（しかし、彼女はそうは言わない。彼女はわたし、が書いた、と言うのだ）もしくは彼女の書いた小説よりも、読むことの出来る無数の好きな作品を読むことのほうが好きなのだ。読むことにつきまとう、嫉妬を含めて。

わたしは新しく書きはじめなくてはならない小説のノートと、一冊の短篇集に纏めるために手直しをする必要のあるすでに書いた何篇かの短篇と、まだ読んでいない本を何冊かと、奇妙な誘惑にひかれて書くことをひき受けてしまった〈自作を語る〉といった内容の原稿を持って湯河原へ行くことになった。むろん、〈自作〉をわたしに語る資格があるかどうかは疑問ではあったのだけれど、それとは別に、温泉へしばらく滞在できる程の金を、自作という商品の売れた収入として持っていたし、それに、温泉に滞在して仕事をすると、という、伝統的な執筆のスタイルに、まるであこがれなかったというわけでもないのだ。

自分の書いた小説について語るということ、あるいは書くこうとしている作品について語る、ということ、なぜ誰でもが回避しようとしながら、ついに語り出してしまふのだろう。沈黙が命ぜられているにもかかわらず、語りは始められる言葉。真実を語ろうとする欲望によって語りはじめられながら、実は真実を覆いつくす言葉を、なぜ語りはじめるのだろう。〈自作を語る〉といったことの中で要求され期待されているものが何なのか、

それはある種の告白というもののなのかもしれない。告白と見せかけたものの中に、巧妙に幻想自体となった《書物》がひそんでいるという形式をわたしは夢想する。ようするに告白することなどは何もなかった。ただ、わたしは自分の小説を読むことに、奇妙な情熱を感じていたのだった。もし、その小説が、本当に彼女の書いたもののだとすれば、すでにわたしは彼女の読者であり、だからこそ、これほどまで情熱を感じているのかもしれない。しかし、わたしは「プラトンの恋愛」という題名だけ決っている小説を書くという計画があった。これは、いったい誰が書くのだろう。彼女なのか、それともわたしか。

予想通り「プラトンの恋愛」は一行も進まず、ノートに書き込む言葉もなく、昼の間は散歩、夜は本を読むか一人でお酒を飲むといった具合に五日間をすごし、その間に、あつ三年前に書いた短篇についてへ自作を語るべく書きはじめようとしてみるのだが、それはすべて彼女の言葉となり、彼女の手紙を引きうつしていることになるのだった。彼女に抵抗しようとして、わたしは花巻の町で灰褐色の雑貨屋の板戸に釘でとめつけてあった兎の毛皮（にかわ膠状）になった血のこびりついている皮をむき出しにしている）のことや、岩手に向う寝台車の中で見た兎の夢のことを書くこうとしてみた。冬の花巻の町の沈んだ曇り空と街並、なんの変哲もない没個性的な地方の町の灰色と褐色と薄青い血管が透けた白っぽい